
ツクリバナシ ~ V ~

KT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツクリバナシ Ⅴ

【コード】

N6080U

【作者名】

KT

【あらすじ】

この話は、ツクリバナシだ。

なぜなら、どこまでが現実でどこまでが妄想で、どこまでが幻覚なのか、私自身にももう分からないから。

2ちゃんねるで書いたものの加筆修正です。

私が大学で体験したことを語ろうと思う。こんなことをするのは初めてなので、長くて読みにくいだろうし、ツクリバナシと思われるかもしれない。私自身も何処までが現実でどこまでが幻覚なのか、私にももう分からないから。

大学4年の春先の事だった。私は社交性に乏しかったから、周りとはあまり関わらない生活を送っていた。幸い頭は然程悪くはなかったから、講義さえ聞いておけば周囲に過去問などを回してもらわずとも試験に受かる程度はできた。当然そんな異端児に向けられる視線は冷たい。どうしても話さざるを得ない時の相手の態度は、まさしく腫れ物扱い。そんな生活があと一年も続くと思うと、げんなりもしていた。

そんな私だったが、その年は随分多くの噂話を聞いたように思う。ただ私自身は当時そうだったものに全く興味が無く、人喰い峠やら幽霊電車やら山の祟り神やらを聞いても、どうとも思わなかった。珍しく話しかけられると訝しみ、鬱陶しく思ったただけだ。

そんな会話にやたらと反応したのは、斜め前の席に座るVだった。

「へえ、さっきの詳しく聞かせてよ。」

Vはいつもへらへらしていて、男女問わず誰とでも話す。顔がいわけでもなかったから皆からは疎まれがちだが、口を聞いてもらえないほどではない。噂していた女子学生達は少々嫌な顔をしながら話していた「赤いコートの女を襲う黒服」の事を話していた。

「夜中に、赤いコートを着てる女を襲うんだって。その噂を聞いた近所の女子高生達が肝試しに大人数で試して、一人も帰ってきてないんだって。」

「普通幽霊って白いじゃん？そいつは黒いの。でも、なんかゆらゆらして、人間とは思えない歩き方するんだって。」

その話を聞きながら、私は見た。Vが笑っている。いつもの阿呆にしか見えないあけつびろげな笑みでは無く、口の端を釣り上げるような笑い。へえ、怖いね、とか言っつて席に戻る奴の唇が、微妙に動く。

「*****。」

ゾクリ。

嫌な感じがした。なんと言っつたかまでは分からなかったが、何かを言っつた。

私は靈感こそ無いが、勘は昔から鋭く、耳も良かった。中学時代にクラスの端での悪口を聞きつけて大喧嘩したことだつてある。この勘は、自分としては、結構信用している。

∴Vが犯人なのではないか。

私は何の根拠も無くそう直感する。少なくとも、このくだらないうわさ話の発信源に近い位置にはいるのではないか。言われてみればVはいつも服は黒だし、その言動は阿呆に見えてその実何を考えているのか分からない節がある。はっきりいって典型的な犯罪者タイプだ。

思い至れば即実行。

私はその日、講義が終わるとすぐに自分の車に向かい、通用ゲ-

ト傍に路駐した。Vは学校まで原付で通学している。車持ちの私なら、あとをつけるのは容易い。案の定、校外へと出て行く時にこちらを見向きもせず、Vは外へと出て行った。

実家生であるVは、独り暮らしの人間に比べるとかなり大学から離れた場所にすんでいる。車で30分といったところか。その日Vは直接帰らないようで、古本屋に寄っていった。まったく、手間取らせてくれる。舌打ちをして、私は車の中でシートを寝かせて待つ。

何分ほどたったか。立ち読みしているとすれば、そこそこの時間がかかるだろう。もともと健康的な生活をしていない私が、ついうとうとしてしまうには十分な時間だ。

コンコン。

コンコン。

突然の窓をたたく音に、私はシートから飛び起きた。

後部座席の窓ガラスに居るのは、V。

あ、け、て、く、れ、よ。

此方の方を向いて口だけを動かす。ばれてしまつては仕方ない。

再度舌打ちしながらロックを解除すると、Vは図々しくも無断で乗り込んできた。

「なんか用か。」

ばればれなのは分かってはいたが、とりあえずしらを切る。

だが、帰ってきたのは、いつもの阿呆のようなVとは似ても似つかない、それこそ何か取り憑いているような半笑い。唇を半分釣り

あげたままの喋りは、口調さえもがいつもと違って聞こえる。

「手伝えよ。気になるんだろ？噂を見せてやるよ。」

あっけにとられる私に、抱えていた紙袋をVが放ってきた。そうか。この店は古本屋と古着屋が繋がっている。私が古本屋を見張っている間に中で移動してきたのか。今更そんな事に気付きながら紙袋の中を覗き込む。ああ、考えなくても分かる。

「今から学校まで戻ってよ。それ着て、丁川の川沿いの道の方にいこう。ユーレイ退治するからさ。」

にやにや笑いが勘に触るが、乗りかかった船だ。

私の車で学校にとんぼ返りする。Vは原付は古本屋に止めっぱなしだ。図々しい奴め。ガソリン代請求してやろうか。暗くなり始めた駐車場に車を止めて、そのまま川沿いへと歩き出す。学校のすぐ脇だ。さして時間はかからない。

そう思っていたら、Vは私を追い抜いてずんずんとさらに先に進んだ。どうやら川沿いというのは正確ではないらしく、どこか別の目的地があるようだ。だが、その説明はない。

「なあ、本当に出るのか？」

普段から不機嫌そうだと評される私だが、今回は本当に不機嫌だ。Vの挙動不審を追跡していれば、いつの間にか幽霊探検だ。不機嫌にもなる。

「ああ、『出る』よ。ほら。」

Vが投げてよこしたのは、携帯電話。開いてみると、ネットニュースが開かれている。二ニュース記事に書かれているのは『女子高生4人軽傷・肝試し中不審者に襲われる』。噂話の正体はこれか。二ニュース記事だけみれば完全に単なる春先の変質者だ。

なんだ。単なる傷害事件じゃないか。なにが『出る』だ。

これを幽霊と称するのは、やはり「赤いコート」とおあつらえ向きの条件があるためか。なんでもそういうふうにつえたがる人種には、悪くない話なのだろう。もっとも、噂のほうで語られていた「帰ってきていない」というのは、噂にありがちな誇張なのだろうし。

「思ったより早かった。こんなに早く傷害事件になるなんてさ。なんかあつたかな。」

前に行くVがこちらを振り返り。

笑った。

とびつきりの笑顔で。私には無い。宝物でも見つけたような表情。

いいよのない悪寒が背筋に走り、私は振り向いた。いた。

黒い影。人の形で、両手をぶらりと下げている。

近づいてくる。速い。でも足は動いていない。歩いていない。

直ぐに逃げるべきだったが、私は食い入るようにその影を見つめていた。もしかすると金縛りとかいうやつだったのかもしれない。影が影で無くなって、人、いや顔や手がある存在であることを認識できた時、ようやく私の口から「あ、あ、」という情けない声が出

た。

と同時に、影がゆっくりと顔と腕を上げ。

後ろから飛来した何かに打たれた。

多分ボールのようなものだったのだろう。

影がもんどりうって倒れた際に私は抱えられる様にして引っ張られ、そのまま走りだした。部活にこそ入っていないけれど、普段から体は鍛えている。鍛えているのだが、悔しい事にこの時はVの方が足が動いていた。まるぶようにしか進めない私を、殆ど右手だけで引き摺っていく。

「うしろみるな。」

背筋のゾクリとした感覚。滝のように流れる冷や汗のまま、振り向いてしまった。よせばよかった。やはり、ついてきている。両手を前にだらりと下ろして俯いて滑るように疾走する、という人間には不可能と思える挙動は、まさしく幽霊。輪郭が白く無い事に違和感があるくらいだ。

見た瞬間に体がこわばり、意識せずに「ひっ」という声がでた。

そのまま足がもつれ、倒れこみそうになる。ここで倒れたら。追いつかれたら。

瞬間、跳んだ。

跳んだ、というよりは、放り投げられた、に近かったかも知れない。吊り上げられるようにして体が浮かび上がり、そのまま横っ跳びに投げ出される。同時に、体があつちりと二本の腕にホールドさ

になった。

そのまま線路へと歩いて行く。当然、そこにあるのは。

「困ったなあ。こんなになるとは。」

かろうじて上体を起こした私からも見えた。真つ二つだ。嫌な事に、縦に。追いかけてきていた時は人間とは思えなかったが、こうしてみるとただの……いや、ただの、という言い方もおかしいが、死体だ。咄嗟に「警察を呼んだ方がいいんじゃないか」という事を口走る。この黒服は幽霊じゃない。こうして死んでいるではないか。

だが、Vはまるで言葉の意味が分からないとばかりに首をすくめた。

「なんて説明するんだよ。幽霊に幽霊が轢かれました、か？」

ゾクリ。

ユウレイガ、ユウレイニ。

そつだ。遮断機は下りていたか？警報機の音はしたか？列車のライトは？

そして。大きく跳ね飛ばされた男の死体が、何故上体を起こしただけの私に見えるのだ？

「退治したかったのはあっちだったんだがな。コイツじゃ弱すぎた。」

Vが無感情にそう言い放った。

後日談。

Vが言うには、あの黒服は『都市伝説』をベースに、『人間』が取りつかれたモノらしい。そしてあの列車は『幽霊』がベースとなつて『都市伝説』の力が後付けされた…といていた。「『人間』が混じつてたからボールも当たるし、死体も残る。単なる『都市伝説』に人間は敵わないさ。」とVは付け加えた。そして『人間』が関わっていないあの列車を消すため、『都市伝説』の黒服を嚇けたが、力の差があり過ぎて話にならなかつたらしい。

このあたりの力学を私が、納得はできないまでも理解するのは、もう少し先の話だ。

(後書き)

シリーズのうちの一つの長編話を、夏のホラーにて話させていたただこうと思っています。文の書き方、投稿の仕方等で良くない点等あればそれまでに直したいと思しますので、よろしければご報告ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6080u/>

ツクリバナシ ~ V ~

2011年10月7日18時54分発行